

## ブラジル

### 移住者の声



海外移住90年を迎えて

ブラジル香川県人会会長 藤堂 光義

母県からの海外移住が始まって、2003年(平成15年)はブラジル移住90年を迎える。

ブラジルは日本からの第1回移民が1908年「かさ丸」にはじまり、香川県からは第5回目の帝国丸で、1913年(大正2年)渡航に2ヵ月を要し、同年10月6日家族28人の移住者がサンパウロ州のサントス港に着いた。配耕地はサンパウロ州の奥地、コーヒー園の労働契約者として、そこから筆舌に尽くしがたい艱難辛苦の生活が始まった。私も父母に連れられ、3歳で1929年(昭和4年)渡伯した。父は第9回木田農々学校卒業生で、ブラジルで大農家になる夢を抱いて渡伯した様だ。彼は、ブラ拓(ブラジル拓殖組合)から10アルケール(日本の25町分)の土地を譲渡契約して、既に自営農家として入植したが(後のチエテ移住地)土地はサントス港から800キロ奥地の森林ばかりの熱帯地だった。最初は20家族が木造の収容所に入り、そこから分離された自分の土地に家建て、井戸を掘り、森林伐採、山焼、作物を植える生活が始まった。気候風土もわからず、何を植えるかとまどった様だが、まず食生活に必要な米(陸稲)の種蒔き等の試作をした。幸い雨量も順調にあり、米の豊作が続いた。1933年(昭和8年)ごろには綿作が導入せられ、収穫時期には白い畑が見られる様になった。父は道楽で写真を撮っていたが日本から3台の写真機を持って来ていた。前記のブラ拓で事業報告の記録写真が必要で、よく呼び出されては、その仕事に取り組んでいた。開拓当時は半農、半商の生活が続き、1934年(昭和9年)父は訪日し再渡伯した。1936年(昭和11年)ごろから百姓をやめ、土地を売って、移住地の小さな市街地に移り、写真屋を専門にやる様になった。当時、世界情勢は陰悪となり、第二次世界大戦に突入する気運が強くなった。1937年(昭和12年)にはアジアにおいて日支事変、1938年(昭和13年)イタリア、ドイツ、日本の三国同盟、1939年(昭和14年)欧州戦争が始まり、ドイツがポーランドへ進出した。戦火は全世界に広まり、1941年(昭和16年)12月8日、ついにアジアにおいて、日米戦争(大東亜戦争)が勃発した。ブラジルは北米英国、欧州の加盟国として、主軸国(イタリア、ドイツ、日本)に対し、1942年(昭和17年)2月宣戦布告をして、戦闘体制に入った。私たち日本人移民は、敵国人となった。父は写真屋をやっていたので、スパイの嫌疑をうけ、2度にわたって投獄され、3年間牢獄生活を送った。家長を失った家族は、おびえながら4年間親族、知人の援助によって糊口をしのぐ有様であった。

1945年(昭和20年)8月15日、生涯忘れることの出来ない日、日本は戦いに敗れ終戦となった。神国日本、必勝の国日本の敗戦は、在伯同胞にとって絶望であり、まったくお先真暗、混沌とした状態に陥った。もう日本国の圏内に帰れない失望は、ブラジルに永住する方針に変えざるを得なかった。従来まで日語教育で築かれ、貴重とされていた日本精神、文化、道徳は、日系コロニアにとっては過去のものとなり、敗戦後は軽視される様になった。

新しい基礎づくりは、日系子弟のブラジル人社会での、遅れを取り戻す教育が率先され、生活様式も団体的生活から、個人主義マイホーム型に変化して、日語教育はおきざりとなった。言わば、日語主動であったものが、ブラジル式が主動に変わったのである。1946年敗戦後1年が過ぎ、父

は子供たちの教育を考え、主都サンパウロ市郊外に移り、慣れない養鶏業を始めた。私も当時のコチア産業組合で働きながら、夜学で規制の速成中学高等科をやった。

しかし、諦めていた日本は1950年代、朝鮮の南北戦争で経済的な立ち直りを見せ、1955年ごろからボツボツと日本企業のブラジル進出が始まった。1970年代は「ブラジルの奇跡」と言われるころ、日伯合弁企業の全盛期時代で、600社以上の企業進出となった。当時、日伯両語を使える日系人は、会社の主要人物として重宝がられ、日系企業から引っ張りだこだった。私もそのころ、豊和工業(本社名古屋)を振り出しに、新日鉄、アルプスアルミ合弁会社に勤務し、最後はブラジル日本商工会議所に10年勤め、退職した。通算すると約30年余り日系企業に働いたことになる。

現在ブラジルの日系人口は、既に四世・五世を含め、140万人と言われている。その中で、日本へ出稼ぎに出ている者が約25万人で、それは戦前戦後を通じて一世移民の数が、日本へ逆戻りしていることになる。また、一世生存者は約7万人、今の日系人口の主力は三世で、その中で30%ぐらいが混血し、ブラジル人社会にとけこんで、ほとんど日本語がわからない。

1980年代以降、日本からの進出企業も減少し、逆にブラジルに見切りをつけて、本国に引き上げ、東南アジア方面に拠点を作る会社も出はじめた。これと言った日本文化的な進展もなく、先細りする日系コロニアはどうなるのかと憂慮される。来る2008年(平成20年)にはブラジル移民百周年を迎えるが、今後の日本文化の伝承を、どの様に維持しながら進めるのか、歴史的に残る大きな問題がある。言えることは、日本人の祖先がいて、現在の私たちがいる。このアイデンティティを後世の子孫に持続せしめ、ブラジルにおける日本人移民史を綴ることが大切だと思う。

最後に香川県人南米移住90年史の編纂を顧みると、感慨無量である。先没者の苦労をわが身に受けながら、尊敬の念と感謝が絶えない。今後も、この輝かしい90年の移住歴史の絆を強め、母県の発展とますますの日伯交流を祈念してやまない。(2002年12月吉日)